

北京崇国寺元代石刻目録補訂

森 田 憲 司

補訂の経緯

『奈良史学』42号に、『元代北方金石碑刻集成・京津卷』（以下「京津卷」と略）の紹介を書かせていただいたが（以下、前稿）、現在北京城内にある元朝石刻のうちでも重要な資料群である、西城区の崇国寺（元代の呼称、現護国寺、以下崇国寺で統一）所在の石刻群についてとりあげるにあたって、関係する既往の文献・資料への言及が不十分で、記述が行きとどかなかった点があった。この号に機会をいただいて、補訂をしておきたい。なお、この問題は、前稿の209頁以下に関わる。

まず、崇国寺の石刻群が元朝時代の史料群として重要な所以を簡述する（前稿と重複）。

北京城の内城は元朝の大都と大きく重なるにもかかわらず、すでに指摘されてきたように、内城に現在まで伝存する元朝時代の石刻の数は多くはなく、たとえば「京津卷」に収録される北京城内の石刻の多くは、近年出土の資料である。その中で、珍しくまとまった資料群なのが、崇国寺所在の石刻群である。しかも、そのうちのいくつかには、公牘が刻されている。

ちなみに、寺としての崇国寺については、『北平研究院北平廟宇調査資料匯編内四区』（文物出版社 2018）所収の、1930年代における北平研究院による調査が、広い寺域を有し、盛んな廟会で知られた同寺のかつての姿を記録している。一方、寺域も狭くなりすっかり衰退してしまった現況については、呂敏主編『北京内城寺廟碑刻志』（国家図書館出版社 2011－）が、新しい情報を提供してくれていて、詳しい（第4卷上）。

そして、筆者が気にかかっている問題の1つは、同寺に所在した元代石刻が、現在どのような形で存在しており、それはどのような形で利用できるか、とい

うことであり、このことは石刻の利用一般の問題にもかかわる。筆者の知る限り、崇国寺石刻の同時代的状況については、上記した1930年代の北平研究院による調査の報告が最後であり、これらの石刻が、現在どこにあり、どうなっているのかについては、全く分からぬ。一方、筆者の知る限りで、最新の文献は、『北京内城寺廟碑刻志』であるが、拓影や録文を掲載するものの、それらの石刻そのものの現況については触れられていない。ちなみに、筆者も崇国寺を二度ほど訪れているが、柵外から建物を望見したのみで、石刻についてはまったく情報を得られなかつた（『北京を見る読む集める』[大修館書店 2008] 225頁以下参照）。

なお、石刻の資料として次に問題となる拓本・拓影については、『寺廟碑刻志』をふくめて、最近の同寺の石刻にかかわる書物では、「北京図書館」（現国家図書館、以下「北京図書館」で統一）や「北京大学図書館」所蔵のものの拓影が用いられている（後の「石刻表」を参照）。

基本的な問題であるが、石刻資料に我々が接する場面として次のようなものがある。まず、原石（しかし、崇国寺の場合、現時点におけるその所在が確認できていない）。以下、拓本、拓影、録文、と原石から離れていく、さらに言えば、加点された録文がある。ただし、録文はその作成者のいわば「研究成果」で、参考とし、利用するのは当然であるが、他人の手によって作成されたものであり、全幅の信頼がおけるものではないことを前提とすべきであることは、崇国寺の石刻についても例外ではない。そういうことで、筆者の関心の中心は拓本、現実的には拓影に向く。ただし、ここでは、録文をも含めて、前稿で言及の足りなかつた点を補訂した石刻目録を提示したいと思う。

また、竺沙雅章に、先行研究『宋元佛教文化史研究』（汲古書院 2000）があり、崇国寺の碑刻のうち『北京図書館藏中国歴代石刻拓本匯編』（以下、「北拓」）に収録されたものについては、加点された録文（その拓影による）を掲載されていること（同書240－249頁）に、前稿で言及していなかつたのは、拓影をテーマとする文章であったとは言え、お恥ずかしい限りである。他にも、前稿では、いくつかの比較的近刊の文献について、言及を怠つたものがあるので、それについての補訂もふくめて、崇国寺の元代石刻の拓影や録文を掲載する文献について、あらためて整理をさせていただこうと思った次第である。

以下、まず崇国寺に所在する石刻と、それを掲載する文献について、「石刻表」を掲げる。各所載文献の出版事項などについては、あとの「文献表」にまとめておいた。なお、前稿が、「京津卷」の紹介なので、この本を配列の先頭とする。

元代崇国寺石刻所載文献表

各項の内容は、次の順。石刻の名称（首題を基本とし、ないものは適宜命名）。次の「京○○」は、北京図書館拓本編号（『北京図書館藏北京石刻拓片目録』[書目文献出版社 1994]による）。二段目は、各文献（略号の説明は後述）の碑陽拓影掲載箇所である。北京図書館所蔵拓本を利用したとおもわれるものについては、各項の最後に、*を付した。「京津卷」には、図版の底本は書かれていなが、録文の底本として、北京図書館の拓本編号が各石刻の解題に書かれているから、おそらくは、北京図書館のものの図版であろうと考え、*を付した。ただし、竺沙のものは録文のみのため、掲載を示すのみ。

崇国寺至元 21 年文書碑（至元 21） 京 337

京津卷 018 *、北拓 48·088 *、人文、洪金富 114、北平研究院 048、北京内城四上 545 *、竺沙

碑陰は「崇国北寺地産図」

*「文書碑」とするのは、京津卷のみだが、この命名が妥当。他の諸本が言うように「聖旨」ではない。碑陽の録文は『元代白話碑集録』にも収載。

大元大崇国寺仏性円融崇教大師演公碑銘并序（皇慶元） 京 338

京津卷 048 *、北拓 49·015 *、人文、北平研究院 052、北京内城四上 550 *、竺沙

碑陰は、「崇国北寺開山第一代宗派図」

通奉大夫湖廣等処行中書省參政速安并男中奉大夫曲迷失不花建塔記（延祐 2、横題「舍利宝塔」） 京 347

京津卷 054 *、北拓 49·040 *、洪金富 329、北平研究院 058、北京内城四上 559 *、竺沙

*姚彤章「記護国寺舍利塔中之藏塔並碑文」（『河北第一博物院半月刊』47 1933）に拓影と録文が、姚彤章「記護国寺舍利塔中之藏塔」（『国立北平研

究院院務彙報』4-3 1933)に録文が、載る。

皇元大都崇国寺重新脩建碑(至正11) 京341

京津卷109*、人文、洪金富721、北平研究院060、北京内城四上567(拓影なし、録文は北京大拓片による)

碑陰は「祖師隆安伝嗣之図」

大都崇国寺至正14年聖旨碑(至正14) 京342

京津卷116*、人文、洪金富748、北平研究院068、北京内城四上574(拓影なし、録文は北京大拓片による)

碑陰は「大都南城崇国寺常住莊田事產記」

*碑陽録文は『元代白話碑集録』にも収載。

大元勅賜大崇国寺壇主空明円証大法師隆安選公特賜澄慧國師伝戒碑有序(至正24) 京339

京津卷125*、北拓50・133*、北平研究院076、北京内城四上575*、竺沙
碑陰は至正23,26年の宣政院箇付、その録文は、『元代白話碑集録』にも収載。

上で使用した文献の略号と書誌事項

京津卷 『元代北方金石碑刻集成・京津卷』(中華書局 2024)、表の数字は石刻番号。

北拓 『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』(中州古籍出版社 1989-) 表の数字は図版の掲載巻数と頁。

*拓影のみ

人文 京都大学人文科学研究所拓本データベース

*同所所蔵の拓本による拓影のみ

洪金富 洪金富著『中央研究院歴史語言研究所蔵元代石刻拓本目録』(中央研究院歴史語言研究所目録索引叢刊 2017)

*小さい拓影のみだが、解題表に撰者や筆者などについては記述。表の数字は石刻番号。

北平研究院 『北平研究院北平廟宇調査資料匯編 内四区』(文物出版社 2018)
表の数字は図版掲載頁。

*拓影と調査当時の録文(ただし加点なし) いずれも1930年代と考えられる。

護国寺の項にまとめられている。

北京内城 呂敏主編『北京内城寺廟碑刻志』（国家図書館出版社 2011－）表の数字は図版掲載頁。

※卷4上に護国寺の項があり、これらの石刻についての言及がある。拓影（一部を除く）と録文（加点）。拓影は「北拓」を利用したと凡例にあり、同書に拓影が収録されていないものについては拓影を掲載せず、北京図書館の「編号」のみを、拓影掲載の石刻と同様に載せている。

竺沙 竺沙雅章著『宋元佛教文化史研究』（汲古書院 2000）所収「崇国寺元代碑刻集録」

※録文（加点）のみ。いずれも「北拓」を用いてのものであることは、竺沙が述べている。

底本の問題

「石刻表」を見ていただければわかるように、これらの文献における図版のいくつかの底本は、北京図書館蔵の拓本であることがわかる。各文献は、石刻の名前のあとに拓本編号を挙げているが、それも同じであるから、同じ拓本のものと思われる。

ただし、拓影は、拓本が拓されたときの打ち方の加減はもとより、同じ拓本からの図版であったとしても、印刷の濃淡などの問題があって、各図版が同じように見える（読める）わけではない（そもそも同じ写真が版下になっているかどうかという問題もあるが、拓本の写真撮影にはいろいろ技術的困難がともなうので、そうそうはおこなわれていないのではないか）。しかも、崇国寺の石刻群の場合は、これまでにも書いたように、原石の所在が現在不明で、疑問の箇所があっても、確認するすべは今のところ見いだせない。こうしたことは、崇国寺に限らずよくあることではあるが、厄介な問題である。

なお、石刻利用の次のステップは、既往の個々の録文とそれへの加点についての検討であるが、各文献を見ていくと所載の録文のそれぞれに問題が見受けられ、まだまだ検討の余地があるので、ここでは扱わない。

以上、前稿の不備を補訂し、利用の便を図ることが、本稿の第一の目的であ

るが、各種文献所載の拓影を主たる資料源としている我々の元朝石刻研究において（森田「史料の刊行から見た二十世紀末日本の元朝史研究」[『元朝の歴史』勉誠出版 2021] 参照）、図版の来源や、さらにはそれに付された録文の検討は不可欠の作業である。ある一つの本で拓影を見たからと言ってそれで済むとは限らないことは、実際に拓影から石刻を利用する際に、絶えず経験することである。ここに、拓影の原本が重複している、さらには既往の文献の図版を転用したものも存在する可能性が大きいにもかかわらず、このような目録を作成した所以であり、たえず増補・整理することが必要な理由である。

なお、以上の内容は、2025年9月の段階で書いているが、「京津卷」の関係部分については、現在「石刻の会」でテキストとして読んでおり、これからも気づくことがあるかと思う。また、文献の利用にあたっては、龍谷大学の村岡倫氏のご助力を得た。記してお礼申し上げる。